

## 「うきよ」について

本年度の春季企画展は豊国をはじめとする歌川派の浮世絵の展覧会です。ところで、この「浮世」とはいったいどういう意味でしょうか。

「うきよ」という表現は既に平安時代の文学作品に登場しています。例えば、『伊勢物語』(10世紀前半)には、「散ればこそいとど桜はめでたけれうき世になにか久しかるべき(散るからこそ桜は素晴らしいのだ。このつらい世の中でも変わらずに続くものなどあるだろうか。)」というように、うし(憂し)の連体形の「うき」に「世」がつくかたちで、つらい世の中という意味で頻出します。ちなみに「世の中」とは男女の関係を指すことが一般的です。平安時代末期には末法思想や浄土思想の影響から無常観、厭い離れるべき俗世、はかなさなどの意味で使われるようになってきます。

そして、本来の「憂うべき」という言葉が、やがて全く逆の意味で使われるようになってきます。つまり、はかないのだから、深刻に考えず享樂的に過ごすべきという使われ方をします。仮名草子『恨の介』(17世紀初期)には、宴会の場で、「夢のうき世をぬめろやれ、遊べや狂へ皆人(夢のような世の中をぬるぬると、遊び狂えよ皆様)」と歌い囃すシーンが登場します。まさに享樂的な様子を「うき世」と表現しています。

さらに、江戸時代には当世風、当代流行の風俗という意味でも使われるようになります。柳亭種彦の随筆『柳亭記』(1826年頃)には、次のように解説されています。「浮世といふに二つあり。一つは憂世の中、これは誰々も知る如く、歌にも詠て古き詞なり。一つの浮世は今様といふに通へり。浮世絵は今様絵なり。(浮世というものには二種類ある。一つは憂うべき世の中で、これは誰でも知るように和歌にも詠まれる古い言葉である。もう一つは当世風というものである。浮世絵は当世風の絵である。)」

さて、皆様は浮世絵から憂いを読み取るのでしょうか、それともウキウキとした享樂的な気分を味わえるのでしょうか。ぜひ企画展で確認してみてください。

春季企画展「豊国と歌川派の浮世絵」(4月26日～6月7日)

(浅井勝利)

## 新潟県指定文化財となった「堀直奇像」

令和8年（2026）3月、当館所蔵の「堀直奇像」が新潟県指定文化財となりました。

堀直奇（1577～1639）は、慶長3年（1598）、上杉氏に代わって越後の領主となった堀氏の一族として越後に入部しました。同15年に堀氏の改易に伴い越後を離れましたが、大坂の陣の軍功により元和2年（1616）に長岡8万石、同4年には村上10万石の領主となり、地域発展の礎を築きました。

本図は、直奇の還暦を祝い、寛永13年（1636）に狩野探幽が直奇の肖像画を描き、これに直奇と親交のあった沢庵ら当代を代表する京都大徳寺の三僧が賛（人物を称える漢

文）を添えたものです。狩野探幽の肖像画制作の様子を知る上で意義深い、優れた作品であるとともに、直奇の晩年の暮らしぶりや沢庵らとの親交を物語る歴史資料としての価値も高いと評価されています。

また、表具には、名物裂（めいぶつぎれ）である「金地二重蔓牡丹文金襴」などを用い、本図に相応しい格式の高い表具形式となっています。

「堀直奇像」は、今年秋のテーマ展「堀直奇の系譜―椎谷藩と村松藩」（9月19日（土）～11月3日（火・祝））において公開予定です。皆様のご来館をお待ちしております。  
（渡部浩二）



画像 堀直奇像（新潟県立歴史博物館蔵）

## ～編集後記～

昨年度末に当館所蔵の「堀直奇像」が新潟県指定文化財となりました。また、4月25日から春季企画展「歌川豊国と歌川派の浮世絵名品跡」を開催しています。「れきはく通信」の今号は、これらに関連する内容です。お楽しみいただけますと幸いです。

「れきはく通信」は、新潟県地域史研究ネットワークニュースと同報のほか、月末更新となる新潟県立歴史博物館のホームページでもご覧いただけます。

ご意見、ご要望は新潟県地域史ネットワークニュース事務局までご連絡ください。

事務局メール [net@nbz.or.jp](mailto:net@nbz.or.jp)